

# 一般財団法人日本禁酒同盟より 寄贈された資料について

後 藤 新

## はじめに

本稿の目的は、2016（平成 28）年 5 月に一般財団法人日本禁酒同盟（以下、日本禁酒同盟）より寄贈された資料について、その概要を紹介することである。

近代日本において禁酒運動は、主にキリスト教のプロテスタント教派によって進められ、その中心的な組織となったのが、（何度か名称を変更するが）日本禁酒同盟であった。禁酒運動の中心はキリスト教と述べたが、仏教においても盛んにおこなわれていた。とくに本学の学祖である高楠順次郎は 1886（明治 19）年、真宗本願寺派（西本願寺）における禁酒団体であった反省会の設立にかかわるなど、若いころより禁酒運動にかかわっていた。高楠は 1934（昭和 9）年より 1940 年まで日本禁酒同盟（当時の名称は財団法人日本国民禁酒同盟）の理事をつとめている。このように禁酒運動は、宗教宗派をこえ全国に波及した、強い政治性も有した大規模な社会改良運動であった。昭和初期には全国の禁酒団体の会員数は合計で 7 万名を超えている<sup>1</sup>。

2015 年冬頃、小塩完次記念日本禁酒同盟資料館（東京都武蔵野市）が閉館することとなり、同館の資料の保存のため寄贈先を探していることを知った。筆者は、寺崎修学長（当時）と中村孝文副学長兼政治経済研究所長（当時）に相談し、高楠が深くかかわった運動であったこともあり、本学政治経済研究所で受け入れることが決まった。

寄贈を受けたのち、筆者は日本禁酒同盟研究員の山本祥弘氏の協力をあおぎながら資料の整理を進めてきた。資料は雑誌や新聞、書簡、書籍、パンフレットなど多岐にわたる。とくに中心となるのは、戦前戦後を通じて禁酒運動に尽力し、日本禁酒同盟の第10代理事長（1976年～1992年）をつとめた小塩完次にかんするものである。なお、小塩は戦前期に禁酒運動を通じて片山哲や賀川豊彦と深くかかわっており、その影響で戦後には世界連邦運動にも参加している<sup>2</sup>。そのため、寄贈を受けた資料は、大きく禁酒運動関係と世界連邦運動関係に分かれる。先述したように、寄贈を受けた資料は多岐にわたり整理に多くの時間がかかっている。本稿ではそのうち、日本禁酒運動関係の資料の概要について紹介したい。

## 1. 日本禁酒同盟について

近代日本における禁酒運動は強い政治性も有した大規模な社会改良運動であったが、それについての研究は決して多くない<sup>3</sup>。これまで女性史やキリスト教史の分野においていくつかなされているが、政治史の観点から言及されることはほとんどなかった。そのため、近代日本において禁酒運動が盛んにおこなわれていたこと自体、あまり知られていないのではないだろうか。そこで、ここではまず近代日本における禁酒運動の歴史について簡単に述べておきたい<sup>4</sup>。

仏教の五戒のひとつとして「不飲酒」が定められているように、禁酒は古くから日本でもおこなわれていた。また、たとえば古典落語の「芝浜」に代表されるように、お酒を飲みすぎて失敗する話や禁酒によって幸福をえる話は枚挙にいとまがなく、禁酒が健康や家庭の幸福のためになることは人々にも広く理解されていた。そのような意味で、日本においても禁酒運動が広がる素地は十分にあったと考えられるが、近代日本において禁酒運動が開始されるきっかけは、1854（嘉永7）年に日米和親条約が調印され、プロテスタント教派の宣教師が来日し始めたことによる。

1875（明治8）年、米国改革派教会の宣教師ブラウンによって洗礼をうけた奥野昌綱を議長に、「キリスト教伝道の一環」<sup>5</sup>として横浜禁酒会（第一次）が設立された。日本人による初めての禁酒団体であるが、この会は副議長の牧野鋭太郎が禁酒の約束を破ったことからすぐに瓦解してしまったようである。しかし、たとえば札幌農学校教頭の W.S. クラークが1876年11月、一期生たちと「イエスを信ずる者の契約」および「禁酒禁煙の誓約書」を交わしたように、キリスト教の伝播とともに禁酒運動は全国へ広がっていった。なお、一期生には、のちに日本禁酒同盟の第3代理事長となる伊藤一隆もいた。

また、仏教界においては1886年、真宗本願寺派（西本願寺）が1881年に設立した普通教校の学生たちが「禁酒進徳」をかかげ反省会を設立した。高楠はこの際の中心人物の一人であった。反省会はこののち、会員数を急速に増やしていき禁酒運動における一大勢力となる。

キリスト教界においても、アメリカで1883年に設立された、非常に強い政治性を有する万国婦人禁酒会（World Woman's Christian Temperance Union）の遊説員レヴィット夫人が1886年6月に来日したことで活気づき、同年12月に矢島楯子を会頭に設立された東京婦人矯風会をはじめ、各地で相次いで禁酒団体が設立された。そして、同時期にハワイでは初代総領事安藤太郎が、サンフランシスコからやってきたメソジスト教会の牧師美山貫一の影響により受洗し、1888年4月に「在布哇日本人禁酒会」を設立して多くの会員をえた。安藤による禁酒運動の成功は、日本国内でも大きな関心を集めた。1889年10月、文子夫人の病氣療養のため安藤が帰国し、禁酒運動の中心的指導者となる。

こうして1890年3月、安藤や東京婦人矯風会の佐々城豊壽らを中心として築地にあったメソジスト教会で東京禁酒会が設立された。12月には安藤が会長に就任し、副会長にはバーモント大学を卒業し帰国したばかりの根本正が選ばれた。また、同年5月、東京禁酒会の事務所がおかれていた東京地学協会の会館で大日本禁酒同盟会が開催された。同会には横浜禁

酒会や北海禁酒会など当時の主要な禁酒団体が参加している。

1898年には東京禁酒会と日本禁酒会に改称していた横浜禁酒会が統合し、日本禁酒同盟が設立した。ついに全国的な組織が確立したのである。なお、会長には安藤、副会長には根本が就任した。根本は1898年3月に実施された第5回総選挙に当選し、1901年には衆議院へ「未成年者飲酒禁止法案」を提出した<sup>6</sup>。禁酒運動においては、まだ飲酒を開始していない子供たちをいかにお酒から遠ざけるかが重要であり、この法案はその一歩であった。根本らの運動はなかなか結実しなかったが、1922（大正12）年にようやく成立した。

その間、1917年には日本禁酒同盟第一回全国大会が甲府で開かれた。その翌年、脱宗教色を強く主張した大阪の禁酒同盟会が脱会し、1919年に青木庄蔵を会長として国民禁酒同盟が設立される。しかし、1920年には、安藤から理事長を引き継いだ長尾半平のもと、日本禁酒同盟と国民禁酒同盟が「宗教に偏せぬ全国的大合同」<sup>7</sup>に成功し財団法人日本国民禁酒同盟が設立した。1922年には全国大会も再開され、戦時中の1943（昭和18）年まで毎年開催された。

なお、1926年には衆議院へ山口政二他12名より25歳未満の飲酒を禁止する「未成年者飲酒禁止法中改正法律案」が提出された<sup>8</sup>。ただし危機感を強めた酒造業界の運動により禁酒に賛同する議員の多くが次の選挙で落選し、同法案は成立しなかった。

しかし、1930年代に世界大恐慌の影響によって生糸の値段の暴落など深刻な経済危機に見舞われると、その打開策として村単位での禁酒運動が各地で実施されるようになった。政府内でも禁酒運動への関心は高く、斎藤実総理大臣は長野県三穂村を始め30以上の村々へ扁額を送っている<sup>9</sup>。部分的な実施も含めると150を超える村で禁酒運動がなされたという。先述したように、このころ高楠は日本国民禁酒同盟の理事を務めている。

戦時色が一層強まるなか、禁酒運動は炭鉱においても浸透した。また、日本国民禁酒同盟も「禁酒報国」をスローガンとし、積極的に戦争協力を

おこなっていた。

戦後、日本国民禁酒同盟は戦災によって解散状態にあったが、1949年、名前を財団法人日本禁酒同盟と改め禁酒運動を再開した。しかし、終戦直後の深刻な食糧難の時代においては、禁酒を求める声も強かったが、戦後復興が進むにつれ伝統的な禁酒運動は衰退し、路線を徐々に変えていくこととなった。経済の成長や醸造技術の発達によって酒類の生産が増加するにともない、アルコール依存症者が増え始めたのである。1953年には同盟内で断酒会が創立され、全国各地で断酒会が次々と設立されるようになっていく。



写真1 「禁酒報告の歌」  
(1940年)

#### 日本禁酒同盟歴代の理事長

|     | 氏名    | 在任期間      |
|-----|-------|-----------|
| 初代  | 安藤 太郎 | 1890～1920 |
| 2代  | 長尾 半平 | 1920～1921 |
| 3代  | 伊藤 一隆 | 1921～1922 |
| 4代  | 長尾 半平 | 1922      |
| 5代  | 林 竜太郎 | 1922～1944 |
| 6代  | 諸 岡 存 | 1944～1946 |
| 7代  | 生江 孝之 | 1946～1957 |
| 8代  | 片山 哲  | 1957～1971 |
| 9代  | 山中 吾郎 | 1973～1976 |
| 10代 | 小塩 完次 | 1976～1992 |
| 11代 | 小塩 玄也 | 1992～2003 |
| 12代 | 加藤 純二 | 2003～2016 |
| 13代 | 中里 強  | 2016～現在   |

(『小塩完次・とよ子の禁酒運動世界連邦運動の歩み』(120頁)より作成)

## 2. 寄贈資料の概要

一般財団法人日本禁酒同盟より寄贈された資料は多岐にわたる。中心となるのは第10代理事長をつとめた小塩完次の収集したものと考えられる。小塩は、1897（明治30）年に長野県下伊那郡飯田町（現在の飯田市）で生まれ、早稲田大学に在学中、澤柳政太郎の提唱した学生排酒連盟の創立に主導的に参画するなど青年期より禁酒運動にかかわっていた。小塩は、大学を卒業後、東京禁酒会に職を得て戦前戦後を通じて禁酒運動に尽力した。

寄贈資料は大きく（1）日本禁酒同盟など禁酒団体の発刊した雑誌や新聞、（2）小塩完次の日記や書簡など個人関係文書、（3）書籍、（4）禁酒運動の際に使用されたポスターや各地の禁酒会・断酒会に関係する資料にわけられる。以下、それぞれについて述べていく。

### （1）日本禁酒同盟など禁酒団体の発刊した雑誌や新聞

#### I. 日本禁酒同盟の機関誌

日本禁酒同盟の機関紙の初めは、東京禁酒会が月刊誌として発刊した『東京禁酒会月報』である。なお、先述したように、近代日本における禁酒運動は東京禁酒会を中心として全国の各禁酒団体が参加する形で拡大していった。そのため、組織の変化にともない機関紙も何度か誌名や発行人を変えている。

東京禁酒会が設立され安藤が会長に就任すると、1890年12月より、渡辺鼎二郎を「発行兼印刷人」として東京禁酒会から『東京禁酒会月報』が刊行された。寄贈資料には残念ながら1号をはじめ欠号があるが、1893年2月に発行された25号までのうち3、5、7-12、14-16、18-20、22-23、25号の計17冊がある。

『東京禁酒会月報』の後継として1893年5月より渡辺鼎二郎を「発行兼編集人」として銀座会館より『禁酒新報』が発刊された。銀座会館は東京禁酒会の事務所が置かれた場所である。これも欠号が多いが1894年12月

に発行された20号までのうち5、6、8、11、20号の計5冊がある。なお、本誌においては確認できる限り、6号より「発行兼編集人」が福井文三に代わっている。

『禁酒新報』は1895年5月より根本正を「発行兼編集人」として『国の光』へ改題した<sup>10</sup>。改題のため本誌は25号から始まるが、寄贈資料には25、68-69、76-80、85、136、140、158、175、177-178、186、190、193、197-198、212、214-218、220-222、232、248、262-263、266-267、272、274、277、298、300、302、304、306、308、311-314、317、321、323-326、331、334号の計57冊がある。

『国の光』の後継誌は『禁酒之日本』であるが、『国の光』がいつまで発行されたのか不明である。寄贈資料よりわかることは1923（大正12）年1月に『禁酒之日本』40号が発刊されたことのみであり、後述するように、他の大学図書館などをみても39号以前の『禁酒之日本』を所蔵している機関はない。寄贈資料には40号から1942（昭和17）年12月に発行された277号まで計238冊がある。『禁酒之日本』の「発行人」は何度か変わっており、1923年1月（40号）から同年5月（44号）まで青木庄蔵、同年6月（45号）から1924年6月（55号）まで伊藤一隆、同年7月（56号）から1928（昭和3）年8月（105号）までふたたび青木が、同年4月（106号）から1929年12月（121号）まで小谷六郎がつとめた。なお、小塩完次は1925年4月（65号）から「編集兼印刷人」として名を連ねており、1930年1月（122号）より「発行人」がいなくなる。このうち1934年7月（176号）



写真2 『禁酒之日本』

から1936年7月(200号)まで永田基が「編集兼印刷人」をつとめるが、これは小塩が1934年5月から12月まで文部省囑託としてヨーロッパ諸国を歴訪しロンドンで開かれた第20回世界禁酒大会に出席するなどし、また、帰国したのち1936年2月におこなわれた第19回衆議院選挙へ立候補したためであろう(結果は落選)<sup>11</sup>。小塩は1936年8月より「編集兼印刷人」に戻り、翌月号から「発行兼編集人」となり1942年12月(277号)まで続けている。

『国の光』や『禁酒之日本』には安部磯雄、内村鑑三、賀川豊彦、小林富次郎(ライオン株式会社の創設者)、澤柳、島田三郎、杉山元治郎、高嶋米峰、田子一民、生江孝之、名和淵海などキリスト教・仏教を問わず、政治家や社会運動家、教育者など多士済済の面々が寄稿している。

## II. 日本禁酒同盟の機関紙

大阪の国民禁酒同盟と統合し設立された日本国民禁酒同盟は、1923年より雑誌のほか月に一度、新聞紙も発行した。最初の数年は新聞紙名が安定しなかった。しかし、1926年より『禁酒新聞』となり、1946年から1949年までの終戦後の一時期を除き、現在まで刊行されている。ただし、その間、1969年から1972年までは『酒なし新聞』、1972年から1974年までは『酒害予防新聞』と名前を変えている。寄贈資料には2010年までの『禁酒新聞』がある。



写真3 「第20回世界禁酒會議報告」  
(1935年)



### Ⅲ. その他の雑誌・新聞

日本禁酒同盟の発刊した雑誌のほかにも、多くの雑誌が寄贈された。

日本キリスト教婦人矯風会の機関誌『婦人新報』も途中欠号はあるものの1926年3月(337号)から2010年12月(1323号)までである。

社会事業家や女性活動家として明治期から昭和期に活躍した守屋東も禁酒運動に尽力した人物であり、とくに幼少期の教育を重視した。守屋は少年禁酒軍を組織し、少年少女のため『少年新報』や『のぞみの友』を発刊した。寄贈資料にも1930年から1933年までに発行された『少年新報』と1931年から1944年までに発行された『のぞみの友』が、欠号があるものの含まれている。

そのほか、1888年6月に千葉県で福田基督教会(現在の日本聖公会福田教会)を中心に設立された北総禁酒会(のち帝国禁酒会関東部と改称)<sup>12</sup>の機関誌『光』も1889年から1891年にかけて3冊ある。寄贈資料にはほかにもさまざまな雑誌が含まれているが、多くは小塩の寄稿した記事が掲載されているものである。

#### (2) 小塩完次の日記や書簡など個人関係文書

先述したように、小塩は戦前戦後を通じて禁酒運動に尽力しており、昭和期における中心的な指導者の一人であった。寄贈資料には1921年から1988年まで計185冊の小塩の日記がある。また、小塩は禁酒運動を通じて多くの人々とかかわりを深めていた。寄贈資料には禁酒運動や断酒運動にかかわる人々からの書簡も多く含まれており、そのなかには



写真4 小塩完次の日記

澤柳や長尾半平、高嶋、山室軍平、賀川からのものもある。そのほか各地の禁酒会や断酒会からの書簡も多く、宮城県鹿島台村の村長を長くつとめ衆院議員も2期つとめた鎌田三之助なども含まれている。



写真5 5月14日付小塩完次宛鎌田三之助書簡（年不詳）

### (3) 書籍・パンフレット

戦前・戦後のものを合わせ多くの書籍も寄贈された。禁酒運動に深くかかわった片山哲や賀川、根本、矢島などの著作のほか、戦前に日本国民禁酒同盟より発刊されたパンフレットも含まれている。そのなかには仏教徒の名和・西田天香による「二宗教家の観たる酒」や貴族院議員やボーイスカウト日本連盟総コミッショナーをつとめた二荒芳徳による「皇室の御慶事と禁酒問題に就て」、京都帝国大学皮膚科教授をつとめた松浦有志太郎による「酒はなぜ飲んで悪いか」、高嶋による「日本仏教徒禁酒運動」、守屋による「家庭と禁酒」など他の大学図書館などに所蔵されていないものも多く含まれている。



写真6 高嶋米峰『日本仏教徒と禁酒運動』日本国民禁酒同盟（年不詳）

#### (4) 禁酒運動の際に使用したポスターや各地の禁酒会・断酒会に関する資料

寄贈資料には1934年（第15回）から1941年（第22回）までの日本国民禁酒同盟会のプログラム（1937年（第18回）をのぞく）をはじめ、小塩は各地の禁酒会・断酒会とも深いつながりを有していたため、各地の禁酒会、断酒会のさまざまな資料が含まれている。そのなかには25歳禁酒法案成立のため設立された期成同盟にかんする資料のほか、「戦時酒造禁止に関する建議」など禁酒運動の政治性をうかがわせる資料や、武蔵野禁酒会にかんする資料、1930年代に長野県下伊那郡三穂村でおこなわれた全村禁酒運動の際、村民へ禁酒の必要を訴えるのに使用された墨書きの資料など、当時の禁酒運動の様子を知ることのできる資料も多くある。また、少し変わったものとしては、戦前期に横浜禁酒会が作成した禁酒カレンダーなどがある。



写真7 第21回全国禁酒大会のプログラム (1940年)

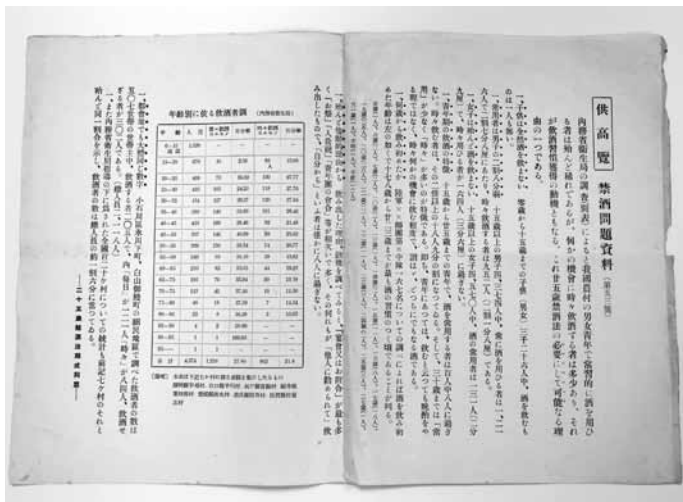


写真8 25歳禁酒法期成同盟のパンフレット (年不詳)



写真9 武蔵野禁酒会のチラシ (1935年)



写真10 「国法を守れ」ポスター  
(年不詳)

### 3 他の所蔵機関における関係資料の所蔵状況

これまで紹介してきたように、日本禁酒同盟から寄贈された資料は多岐にわっており、戦前戦後の禁酒運動を知るうえで大変に貴重なものである。

なお、先述したように、禁酒運動はキリスト教プロテスタント派によって推進されたことから、キリスト教系の大学図書館などに関係する資料が所蔵されている場合もある。

たとえば、『国の光』については青山学院大学図書館や同志社大学図書館に寄贈資料を大きく超える号数が所蔵されている。また、東京大学にも、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）に『東京禁酒会月報』1号をはじめ『禁酒新報』などが所蔵されており、『国の光』については寄贈資料にないものも所蔵されている。

ただし、本研究所へ寄贈された資料のように多岐にわたっておらず、また、他の大学図書館をはじめとして他の所蔵機関にないものも多い。今後も寄贈資料の整理を進め、あわせて他の所蔵機関の調査もおこなうことで、禁酒運動についての資料の把握はより進むだろう。

## おわりに

以上、本稿では、本学政治経済研究所に寄贈され一般財団法人日本禁酒同盟の資料について概要を述べてきた。

筆者は「日本禁酒同盟寄贈資料群の整理と調査研究」をテーマとして本学の2018年度学院特別研究（多年度）に採用され、寄贈資料の整理と調査研究を進めてきた。ようやく寄贈資料の整理にも目途がついたため、本稿でその概要を紹介した。今後も引き続き作業を進め、一日でも早く寄贈資料の目録リストを完成させたいと考えている。

一方で、調査研究はまだ緒についたばかりである。先述したように、禁酒運動についての研究はまだまだ少なく、寄贈資料が研究を大きく進めることは間違いない。整理された資料を利用し調査研究を進めていきたい。

日本における禁酒運動について研究することは、他分野の研究にたいしても大きく貢献できると考えている。たとえば、禁酒運動は世界的に流行したため、アメリカを中心として世界各国で盛んに研究が進められている。日本における禁酒運動の解明が世界的な禁酒運動史の解明に貢献することは言うまでもないだろう。そのほか日本におけるキリスト教史研究、女性史研究、社会運動史研究、教育史研究、医学史研究、地方史研究、戦時体制研究など多くの分野に新たな知見をあたえるものと期待される。今後も寄贈資料の整理を進めるとともに、近代日本の禁酒運動について明らかにしていきたい。

※本稿は「平成 29 年度・30 年度武蔵野大学学院特別研究費」による研究成果の一部である。また、寄贈資料の整理を進めるなか、一般財団法人日本禁酒同盟の前事務局長小塩立吉氏の訃報に接した。小塩氏には生前、多くのご教示をいただいた。ここに小塩氏への感謝を記すとともに、ご冥福を心よりお祈りする次第である。

## 注

- 1 永田基編『全国禁酒団体名簿』日本国民禁酒同盟、1928 年。
- 2 小塩立吉他編『小塩完次・とよ子の禁酒運動世界連邦運動の歩み』（非売品）、日本禁酒同盟資料館、2011 年。なお、世界連邦運動の開始期については、小南浩一「賀川豊彦と世界連邦運動」（『法政論叢』44 巻 2 号、日本法政学会、2008 年）などに詳しい。
- 3 たとえば江島尚俊は「これまで近代日本の禁酒活動については、社会運動史や風俗改善史といった観点から捉えられることが多かった」（「仏教改革としての禁酒」『宗教研究』84 巻 4 輯、日本宗教学会、2011 年）と指摘している。近代日本の禁酒運動について広い射程から言及した研究として、二宮一枝「近代日本における禁酒運動のパラダイム」（『岡山県立大学保健福祉学部紀要』14 号、岡山県立大学、2007 年）があるが、二宮は禁酒運動の「発展過程」について「『基督教から仏教へ』、そして『脱宗教』へと向かい『社会的意義を考究する全国組織』と『禁酒村』の誕生、さらには国家的立法政策へと発展」（58 頁）と述べている。しかし、本稿でも明らかにするように「基督教」と「仏教」は切磋琢磨しながら共に禁酒運動を進めており、そのような理解には疑問を感じざるをえない。また、禁酒運動の歴史については小塩完次『日本禁酒運動の八十年—東京禁酒会 1890-1970』（日本禁酒同盟、1970 年）があるが、小塩は戦前戦後を通じて禁酒運動の中心的な役割を担った人物であり、貴重な文献ながらも研究と呼べるものではない。
- 4 以下、とくに注のない場合は、拙稿「近代日本における禁酒運動—1890 年東京禁酒会の設立まで—」（前掲『法政論叢』55 巻 1 号、2019 年春に刊行予定）と前掲『小塩完次・とよ子の禁酒運動世界連邦運動の歩み』を参考とした。

- 5 小林敏志「上田禁酒会と旧上田藩士たち」(『信濃〔第三次〕』67巻3号、信濃史学会、2015年3月)47頁。
- 6 「第15回帝国議会衆議院議事速記録」第七号(官報号外)、1901年2月10日、印刷局、13頁。
- 7 永田基編『安藤太郎全集』日本国民禁酒同盟、1929年、奥付。
- 8 「第51回帝国議会衆議院議事速記録」第37号(2)(官報号外)、1926年3月26日、内閣印刷局、1088頁。
- 9 前掲『小塩完次・とよ子の禁酒運動世界連邦運動の歩み』93頁。
- 10 『国の光』25号、銀座会館、1895年5月、1頁。
- 11 前掲『小塩完次・とよ子の禁酒運動世界連邦運動の歩み』175頁。
- 12 1888年5月2日付『基督教新聞』、『横浜禁酒会雑誌』10号、横浜禁酒会、1889年8月、20頁。